

フランス旧産炭地が挑む 炭鉱から観光への転換 北部ランスを訪ねて

志子田 徹

北海道新聞ロンドン支局

炭鉱で栄えたマチが閉山後は低迷し、地域再生に必死に取り組んでいるのは、欧州でも日本でも事情は同じだ。旧産炭地であるフランス最北部のノール・パ・ド・カレ地方は閉山後、「フランスで最も貧しい地方」と言われてきたが、最近、大きな注目を集めている。一つは、旧炭鉱施設が国連教育科学文化機関（ユネスコ）の世界遺産に登録されたこと、もう一つはルーブル美術館の別館を誘致したからだ。炭鉱から観光へ、転換はまだ途上だが、住民たちは地域の再生に向けて、着実に歩み始めている。道内自治体の参考になるかと思ひ、現地を訪ねた。

「世界遺産なんて無理だ」

フランス最北部、ベルギー国境に近いノール・パ・ド・カレ地方にある人口約三万六千人のランス市は、パリからフランス版新幹線である高速鉄

道TGVで約一時間一五分。ランスと言えば日本では、同じ名前でやはり北部にあるシャンパン産地が知られているが、ノール・パ・ド・カレ地方のランスは、車窓から小高いズリ山や立て坑やぐらが点在しているのを見ることができ、旧産炭地の中心都市の一つだ。

ノール・パ・ド・カレ地方には東西二二〇キロ、南北一五キロの広範な炭田地帯があり、一八世紀初めから石炭を掘ってきた。炭鉱住宅やズリ山、立て坑巻き上げやぐらなど三〇〇カ所以上の炭鉱関連施設が点在しており、最盛期だった戦後復興期の一九四〇年代には、炭鉱会社十数社で労働者約二二万人が働いていた。ランスに拠点を置くプロのサッカークラブ「RCランス」も、もともと炭鉱労働者たちが作ったチームが母体で、サポートー事務局長のペロニク・デフォセさん（五三歳）は「この地域は炭鉱が全てだったのよ」と説明してくれた。

だが、炭鉱は一九六〇年代に相次ぎ閉鎖が決定。一九九〇年にはすべての操業を終え、閉山後はランスだけで約一万人が減った。フランス政府は工場の誘致や中小企業の創設などを支援し、ランスから約六〇キロ離れたバランシエンヌ市にはトヨタなどの自動車工場が集まったが、ランス周辺に大きな工場は来なかった。「マチが崩壊せずに来られたのは、炭鉱労働者や失業者用の手当、生活保護のおかげですよ」。ランス市のティエリー・ドブレス副市長（五六歳）は自嘲気味に語った。

こうしたどん底の中、九〇年代後半に持ち上がったのが世界遺産を目指す構想だった。「最初は誰もが『世界遺産なんて無理だ』って言いましたよ」。ランスの隣町ロス・アン・ゴエル町長のジャン・フランソワ・キャロンさん（五六歳）は、当時を振り返って話した。「炭鉱の閉山後は見捨てられて悲劇的な地域となり、人々は落胆していました。でも、世界遺産になれば、住民に誇りが生まれると思ったのです」。

魅力は自分たちが発見

炭鉱施設をめぐるのは、一九八〇年代から保存の是非が議論されていた。もう終わったことだ、新たな産業誘致にエネルギーを注ぐべきだ、といった意見も強かった。だが、キャロン町長らは二〇〇〇年、旧炭鉱施設を抱えていた各自治体に呼びかけて、「産炭地の使命」協会を設立。協会

が中心となって保存状態の調査や意見交換を重ねる中で、世界遺産を目指すアイデアが出てきた。登録には何が必要なのか、どういう申請をすれば良いのか、専門家を招いて継続的に議論した。

登録を目指す活動に参加し、現在は「産炭地の使命」協会に勤めるナイマ・マジズさん（三二歳）は「炭鉱施設の調査を進める中で一番大事だったのは、この地域の独自性は何なのか、自分たちで気づいたことでした」と強調する。一九あつた立て坑ごとに数百戸の炭鉱住宅や学校、病院などコミュニティが形成され、炭鉱閉鎖後も公営住宅として生活の場になっていた。つまり、歴史をつくってきた人々の暮らしも文化も、すべてが残っていたのだ。また、協会の活動が広がる中で、住民の間にも「産業を支えてきた地域として自信を持つべきではないか」といった、旧産炭地であることを前向きにとらえる意識が高まった。

地道な調査と住民との意見交換を重ねること一〇年余。二〇一〇年、ユネスコに登録を申請すると二〇一二年六月、「廃れず変化していく文化風景」として、一回の審査で世界遺産に認められた。旧炭鉱関連施設から住宅や学校、人々の暮らしぶりを含めて、産炭地のすべてが登録の対象となったのだ。

世界遺産になったことで、何が変わったか。ランス観光局のマーレンヌ・ブレイさん（三五歳）は「目に見えた変化はまだ多くないですが、間違いなく住民が地域に誇りを持つようになりました」



世界遺産に登録されたノール・パ・ド・カレ地方の旧炭鉱施設。観光客も訪れるようになった（筆者撮影）

と目を輝かせる。ブレイさんはパリ出身で一一年前にこの地域に移ってきた。「来た頃は何も無い、失われたマチという印象でした。でも今、多くの人々がまちを再生しよう、という気持ちを持ち始めているのです」。

ブレイさんに、炭鉱施設を改修した新しいレストランに連れて行ってもらった。肉をビールで煮込んだ郷土料理などを提供しており、昼時だったこともあり満席だった。店内には炭鉱で働いてい

た人たちの写真が飾られ、当時使っていた道具なども展示してある。「フランスなのに、この地方はワインを造ってないしチーズも有名でなく、郷土料理を全面に出す店はありませんでした。この店は先代まで花屋をやっていましたが、後を継いだ息子がレストランに変え、地域性をアピールし始めたのです」。多くの人が新たな産業の柱として観光に期待している、そう言ってブレイさんは喜んだ。

炭鉱跡地に美術館を

世界遺産登録に向けた運動を進める中で、ランスの住民たちは、さらに大きな目標を掲げるようになった。世界で最も有名な美術館の一つ、パリにある国立「ルーブル美術館」別館を誘致するからだ。

フランス政府とルーブル美術館は一九九〇年代から、「文化の地方分権」を検討しており、二〇〇三年に別館建設計画を公表した。美術館で地域活性化を図ることを目標に掲げたため、候補地の条件は「経済が厳しく、文化から遠い地域」とした。その結果、名乗りを上げた五自治体は全て、ノール・パ・ド・カレ地方だった。ランス市は各地から人材を募って誘致チームを結成し、炭鉱跡地の活用を柱に据えた。当時の文化担当大臣が訪れた際には、炭鉱住宅の住民が自宅でもてなすなど、気さくな地域性もアピールした。こうした活動が

実つて翌年、白羽の矢が立った。

「正直に言つて、この住民は美術と縁遠い生活を送ってきました。だからこそ、美術館の素晴らしさを知つてほしかったのです」と、「ルーブル・ランス」館長のグザビエ・デクトさん（四一歳）は話す。決め手の一つは、ランスが炭鉱跡地の活用を打ち出したことだった。二〇一二年一月に開館したルーブル・ランスは、ランス駅から専用バスで二〇分弱。炭鉱住宅街の中にあり、敷地は



日本人建築家が設計した、ルーブル美術館の別館である「ルーブル・ランス」。旧炭鉱施設の跡地を活用した（筆者撮影）

平らで草木は少なく、地面がむき出しのところさえある。

日本人建築家の妹島和世氏と西沢立衛氏による建築ユニットSANA Aが手がけ、敷地は二二万平方メートル、建物はガラスとアルミニウムの平屋建てで一七千平方メートル。紀元前三五〇〇年前から一九世紀までの絵画や彫刻など常設の二〇五点は、全てパリのルーブル本館のコレクションから選び出されたもので、定期的に更新される。パリやロンドン、ブリュッセルといった大都市から、それぞれ数時間という地の利もあり、開館一年二カ月の今年一月には一〇〇万人を突破した。このうち地元住民は一割以上を占めており、いずれも当初予想を上回る来館者数だ。

希望はエネルギーの源

「フランスで最も貧しい」と言われたノール・パ・ド・カレ地方だが、世界遺産とルーブル誘致で、再生のきっかけはつかなかった。住民の期待も高まっている。ランスの旧炭鉱住宅に住んでいるオレリー・グリッダさん（三〇歳）は「世界遺産に住んでいるんだからすごいことよね」、父親が炭鉱で働いていたジャン・リュック・ゴザさん（四六歳）も「物心ついた時から地域は衰退し続けたが、今後はどんどん良くなると思うよ」と喜ぶ。

ルーブルの隣接地には高級ホテルやレストランの建設計画が浮上しており、街中まで散策できる

歩道も整備予定だ。また、ランス観光協会は「炭鉱からルーブルまで」と題したガイドツアーを開始し、炭鉱で働いていた人たちに「語り部」となってもらうツアーも準備中だ。

とはいえ、観光都市への道のりは容易でない。ホテルや飲食店がほとんどないなどインフラ整備が全く追いついておらず、美術館と炭鉱施設との連携も十分ではないため、せっかくルーブルに来た客も展示品を見るだけで帰っている。また、世界遺産に関しては、炭鉱労働者らの中に事故や過酷な労働の記憶をとどめることに抵抗を感じている人もいる。「観光では頼りない、新しい産業の誘致を」との意見も根強い。

ランス市のドブレス副市長は「産炭地から観光都市への転換は、一夜にしてなるほど簡単ではありません。しかし、貧しい労働者のまちが、大きくイメージアップしたことに期待する住民は増えています」と語った。再生に向けたまちづくりは始まったばかりだと言える。

北海道の旧産炭地にも、参考になることがあるのではないかと。世界遺産登録を呼びかけたロス・アン・ゴエル町のキャロン町長に、北海道にも旧炭鉱があると言うと、エールを送ってくれた。「ノール・パ・ド・カレの住民たちは再び未来に目を向けるようになりました。希望を持つことが、エネルギーを生み出すのです」。

△しただ とおる△